

平成 22年 6月 14日現在

研究種目：若手研究B
 研究期間：2007～2008
 課題番号：20730343
 研究課題名（和文） 近現代出版メディアに関する歴史社会学的研究
 —大宅壮一を中心に—
 研究課題名（英文） A Study of Historical Sociology on Modern Publication:
 Focused on Soichi Oya
 研究代表者
 阪本 博志 (SAKAMOTO HIROSHI)
 宮崎公立大学・人文学部・准教授
 研究者番号：10438319

研究成果の概要（和文）：本研究の主な研究成果は次の3点である。第1に、それまで行ってきた1950年代を代表する大衆娯楽雑誌『平凡』の研究をまとめた書物を上梓した。これは、その影響力の大きさにもかかわらず先行研究の乏しかった『平凡』に関する初のまとまった著作である。第2に、まとまった研究の乏しい大宅壮一について、全集未収録のものを中心に主に戦後の著作を収集するとともに、大宅を直接知る人達へのインタビューを行った。これらで得た知見の一部を学術論文として発表した。第3に、出版メディア史の変遷やマクロな社会の変動と個人のライフヒストリーとのかかわりについて考察した学術論文を発表した。

研究成果の概要（英文）：The main results of this research are as follows. First, I have published a book on popular magazine "Heibon". It was most widely read in the 1950s so I continued to investigate this magazine. In spite of its influence, there were only a few previous studies on it. Second, I have written a paper on Soichi Oya. His life-history has hardly been researched. So I collected his writing after World War II and interviewed the people who had worked with him. Third, I have made a paper in which I considered between the change of the society, the vicissitude through the publication history and the life-history of the individual.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：大宅壮一 猿取哲 『平凡』 ライフヒストリー 占領期 高度成長期
 出版メディア史 雑誌

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、1950年代に最も読まれた大衆娯楽雑誌である『平凡』の研究を行って

きた。同誌はテレビの本格的な普及以前にラジオ・映画と結びつき人々の支持を得ていた。研究代表者は、同誌読者の勤労青少年達の投書や文通・読者組織活動に着眼し、同誌を軸とした大衆文化の展開や読者の営みの再構成を行った。そしてそれを踏まえた戦後社会論の構築を試みた。これらをまとめた博士論文により、2004年に京都大学博士（文学）の学位を取得し、その後も追加取材に取り組むなど、学位論文をもとにした書籍の作成を進めた。このように、出版物を軸に1950年代の大衆文化を再構成し戦後日本を照射する試みに取り組んできた。

この研究をさらに発展させるためには、1950年代を起点に近現代出版メディアへとその視野を広げていく必要がある。そのために近代と1950年代の連続性さらには1950年代から現在への連続性をも把握するために着眼する最適の研究対象として、1920年代に活動を開始し1950年代から1960年代にかけてその最盛期を迎えた評論家・大宅壮一（1900-1970）が浮かび上がってきた。この時期週刊誌・新書に代表される「中間文化」（加藤秀俊）の興隆や民間ラジオ放送の開始・テレビの普及の中で評論家として最も脂の乗った時期を迎えた大宅は、新聞・雑誌・ラジオ・テレビを舞台として活躍する「マスコミ四冠王」と言われ、「マスコミの帝王」の呼び名をほしいままにしていたのである。翻って大宅に関する学術的研究の蓄積を見ると、「マスコミの帝王」とまで言われた大物にしては、学術的蓄積が意外に乏しく、彼のライフヒストリーをトータルに把握し出版メディアやマクロな社会的背景とのかかわりを考察した研究は、管見では皆無であった。そのためそれを志向した大宅研究の最初の成果「大宅壮一研究序説——戦間期と昭和30年代との連続性／非連続性——」を、『文学』2008年3・4月号（特集「戦後大衆文化と文学 昭和30年代をよむ」）において発表した。

2. 研究の目的

大宅壮一のライフヒストリーに歴史社会的な考察を加えることが本研究の目的である。具体的には、彼のライフヒストリーを、近現代に渡る出版メディア史ひいてはメディア史全般さらには日本社会のマクロな変動とともに分析する。この考察を通して、近現代メディア史を見つめなおす新たなパースペクティブの構築を目指す。

なお彼のライフヒストリーを解明していくに当たっては、1950年代の出版メディアとの連続性という観点からも、1920年代から1970年に渡る彼の活動期間のうち、彼が最盛期を迎えるにいたる戦後にまず注目す

る。

3. 研究の方法

大宅没後に『大宅壮一全集』全30巻別巻1冊が編まれているが、これには未収録の著作も多く、厳密な意味において大宅の書いたものの全体像とは言いがたい。その上その編集委員が他界していることから、全集を足がかりに大宅の著作の全体像を明らかにする作業を進めた。この調査においては主に国立国会図書館・財団法人大宅壮一文庫を利用し、特に戦後の著作を多数収集した。それと並行して、大宅を直接知る関係者へのインタビュー調査を遂行した。

また出版メディア史の変遷やマクロな社会の変動と個人のライフヒストリーとのかかわりについて社会学的考察を深めた。

4. 研究成果

主な研究成果は次の3点である。

第1に、昭和30年代に最盛期を迎えた大宅のライフヒストリーを通して近現代出版メディアを歴史社会的に論じる基盤を整地すべく、それまで行ってきた1950年代を代表する大衆娯楽雑誌『平凡』の研究をまとめた書物を上梓した（下記[図書]の①）。これは、その影響力の大きさにもかかわらず先行研究の乏しかった『平凡』に関する初のまとまった著作であり、第30回日本出版学会賞奨励賞・第18回橋本峰雄賞を受賞した。そのほか現在まで30を越える新聞・雑誌で書評・紹介がなされるなど、その重要性は広く認識されている。

『平凡』についてこのほかにも知見を発表するとともに（たとえば、[その他]の「その他の著作」⑤）、近現代の出版メディアについても考察を行った（[その他]の「その他の著作」①⑩⑭）。このようにして、近現代出版メディア史の文脈から大宅を議論する下地を整地した。

第2に、全集未収録のものを中心に大宅の主に戦後の著作を収集するとともに、担当編集者や「大宅壮一東京マス・コミ塾」修了者など生前の大宅を直接知る人達へのインタビューを行った。これらで得た知見の一部を雑誌論文として発表したほか、口頭発表を行った（[雑誌論文]の②、[学会発表]の④）。この成果は2009年度以降も発表予定である。これらは、大宅の戦後の活動の全体像を明らかにする重要な足がかりとなるものであり、ここからさらに大宅のライフヒストリーを解明しそこから近現代出版メディア史ひいては近現代社会に光を当てていくことが可能になる。

第3に、出版メディア史の変遷やマクロな

社会の変動と個人のライフヒストリーとの
かかわりについて考察し学会等で報告する
とともに論文にまとめ発表した（[学会発表]
の①②③、[雑誌論文]の①）。このようにし
て出版メディアとライフヒストリーとの関
連性を探究したことは、本研究の目的に鑑み
ても、今後の大宅研究に活かされよう。

これらのほか研究で得た知見を広く社会
に伝えるべく、新聞等への寄稿を行った（[そ
の他]の「その他の著作」の②④⑥⑦⑧⑨⑬
⑮）。またインタビュー取材に応じた（[その
他]の「インタビュー記事」の①～⑥）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線）

〔図書〕（計1件）

①阪本博志『『平凡』の時代——1950年代の
大衆娯楽雑誌と若者たち
』単著、昭和堂、全344頁、2008年5月、
第30回日本出版学会賞奨励賞・第18回橋本
峰雄賞

〔雑誌論文〕（計2件）

①阪本博志「西村和義の「戦後」——『平凡』
読者との文通運動から国際交流へ——」単著、
『メディア史研究』第26号、メディア史研
究会、133-150頁、2009年10月、査読有

②阪本博志「大宅壮一の対談に関する覚書—
—『週刊文春』連載「大宅壮一人物料理教室」
「大宅対談」を中心に——」単著、『宮崎公
立大学人文学部紀要』第17巻第1号、宮崎
公立大学、263-282頁、2010年3月、査読無

〔学会発表〕（計4件）

①阪本博志「大宅壮一と西村和義——『平
凡』の時代』を超えて——」単著、創価大学
社会学会講演会、2008年7月

②阪本博志「出版文化とライフヒストリー」
単著、日本出版学会関西部会 2008年度第2
回（通算53回）関西部会（於関西学院大学）、
2008年8月

③阪本博志「文通運動から国際交流へ——
1950年代『平凡』と西村和義のライフヒスト
リー——」単著、20世紀メディア研究所第
45回研究会（於早稲田大学）、2008年11月

④阪本博志「占領期の大宅壮一——「大宅壮
一」と「猿取哲」／戦前の活動から「無思
想人」宣言」へ——」単著、早稲田大学 20

世紀メディア研究所「早稲田大学 20 世紀メ
ディア研究所第 54 回特別研究会 占領期雑
誌資料大系文学篇刊行記念シンポジウム」
（於早稲田大学）、2010年4月

〔その他〕

その他の著作

①阪本博志「書評 藤井淑禎『清張 闘う作家
文学を超えて』」単著、『立教大学日本文学』
第100号、立教大学日本文学会、161-164頁、
2008年7月

②阪本博志「きのうきょう 「『平凡』の時
代」を著した阪本博志氏」単著、『聖教新聞』
2008年8月27日7面

③阪本博志「出版文化とライフヒストリー—
—「『平凡』の時代」と西村和義」単著、『日
本出版学会会報』第122号、日本出版学会、
59-60頁、2008年9月

④阪本博志「書評 森正人『大衆音楽史』」単
著、『産経新聞』2008年9月28日13面

⑤阪本博志「“見る雑誌”『平凡』の時代」単
著、『占領期雑誌資料大系大衆文化編Ⅱ 月
報2』、岩波書店、3-5頁、2008年11月

⑥阪本博志「この人・この3冊 大宅壮一」
単著、『毎日新聞』2009年4月5日朝刊9面

⑦阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 新聞
は社会の命綱」単著、『宮崎日日新聞』2009
年6月7日朝刊2面

⑧阪本博志「雑誌『平凡』で読む 1950年代
の世相」単著、『公明新聞』2009年7月12日
4面

⑨阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 過剰
な美化表現疑問」単著、『宮崎日日新聞』2009
年10月4日朝刊2面

⑩阪本博志「日本出版学会賞奨励賞を受賞し
て」単著、『日本出版学会会報』第125号、
日本出版学会、41-43頁、2009年10月

⑪阪本博志「書評 山本武利・石井仁志・谷
川建司・原田健一編『占領期雑誌資料大系大
衆文化編Ⅴ 占領から戦後へ』」単著、『週刊
読書人』2009年11月20日号3面

⑫阪本博志「ストーリーキング」「ストリップ」
「ラブホテル」単著、小島美子・三隅治雄・
宮家準・宮田登・和崎春日編集代表『祭・芸

能・行事大辞典』、朝倉書店、2009年11月

⑬ 阪本博志「紙面診断 宮日を読んで 若者の取り込みが鍵」単著、『宮崎日日新聞』2010年2月7日朝刊2面

⑭ 阪本博志「書評 吉川登編『近代大阪の出版』」単著、『週刊読書人』2010年4月9日号6面

⑮ 阪本博志「大宅壮一における多様性について」単著、『世界思想』第37号、世界思想社、31-34頁、2010年4月

インタビュー記事

① 「大衆との歩み再評価 戦後文化を彩った若者雑誌」『讀賣新聞』2008年5月14日夕刊

② 「『平凡』で大衆文化研究 阪本講師（宮崎公立大）が本出版」『宮崎日日新聞』2008年5月28日朝刊

③ 「『平凡』の時代 著者阪本博志さん」『毎日新聞』2008年7月20日朝刊

④ 「著者インタビュー 阪本博志」『サンデー毎日』2008年8月17日号、106頁

⑤ 「『平凡』の時代 文化探る 阪本博志・宮崎公立大准教授、著書“2冠”」『朝日新聞』2010年2月3日朝刊宮崎面

⑥ 「出版の今、活字の意義 宮崎公立大准教授に聞く」『宮崎日日新聞』2010年3月5日朝刊

番組出演

① 『ちょっとパジャマは早すぎる』へのゲスト出演、JRT 四国放送ラジオ、2008年7月23日20時～21時30分

② 『サンデーラジオ大学』へのゲスト出演、MRT 宮崎放送ラジオ、2008年8月17日17時～18時

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 博志 (SAKAMOTO HIROSHI)
宮崎公立大学・人文学部・准教授
研究者番号：10438319

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：